

國民修身書

尋常小
學校用

卷三

4
357

檢定合格本

K120.1
.83a
3

株式會社 國光社 編纂

國民修身書

東京 株式會社 國光社

國民修身書 尋常小學校 三目次

第一課	神武天皇(一)	第十四課	楠正成卿(一)
第二課	神武天皇(二)	第十五課	楠正行卿(一)
第三課	神武天皇(三)	第十六課	楠正行卿(二)
第四課	日本武尊(一)	第十七課	伊藤仁齋先生(一)
第五課	日本武尊(二)	第十八課	伊藤仁齋先生(二)
第六課	菅原道真公(一)	第十九課	伊藤仁齋先生(三)
第七課	菅原道真公(二)	第二十課	伊藤仁齋先生(四)
第八課	菅原道真公(三)	第二十一課	鹽原多助(一)
第九課	和氣清麿公(一)	第二十二課	鹽原多助(二)
第十課	和氣清麿公(二)	第二十三課	鹽原多助(三)
第十一課	和氣清麿公及其姊	第二十四課	公徳
第十二課	藤四郎	第二十五課	大和心
第十三課	楠正成卿(一)		



第一課 君が代

君が代は

千代に八千代に

さざれ石の

いはほとなりて

こけのむすまで

第二課

神武天皇

神武天皇様は、天照大御神様の五世の御
す名であらせられました。

天皇様は、みやこを、國のまん中にさだめ
て、天下の民をめぐまうとおぼしめされ
て、日向國をおたちなされました。

大和には、ながすねひこといふ、おるもの
がゐて、天皇様に、てむかひました。が、そ

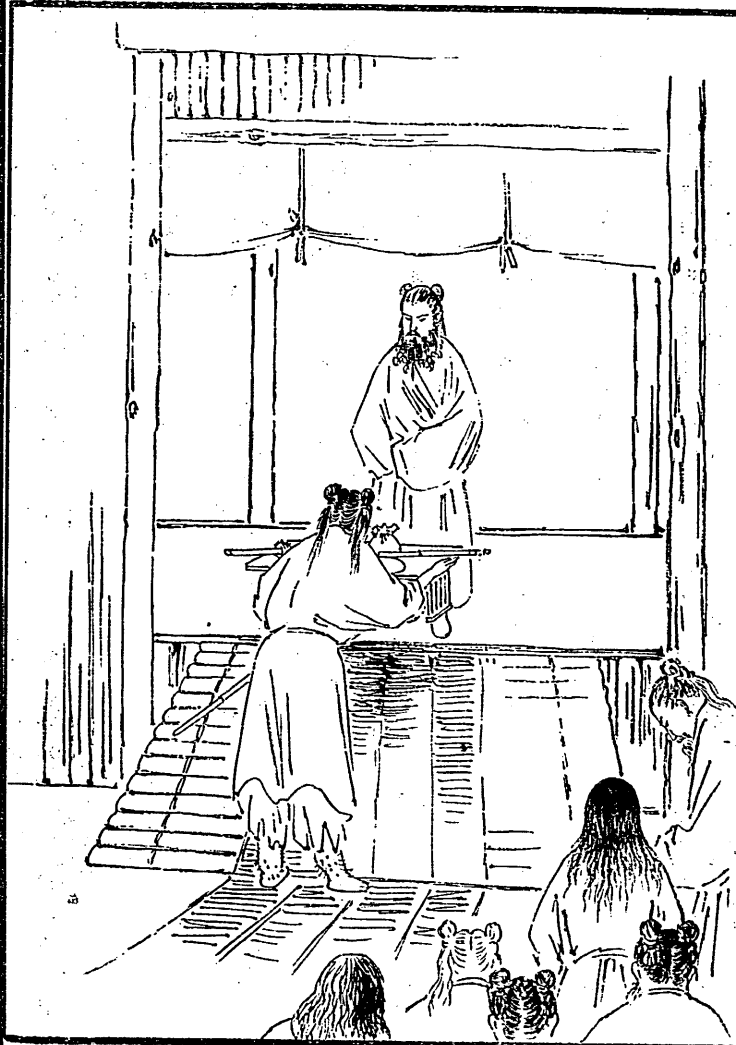


のとき、やたがらすが、天皇様のおみら
びきをいたしました。

また、金いろのとびが、光をはなつたゆゑ、
わるものどもの目が、くらみました。

第三課 神武天皇 ③

神武天皇様は、わるものどもをうちたひ
らげたまうて、みやこを大和ヤマトの橿原カシハラの地
にさだめて、はじめて、御位につかせられ



ました。二月十一日の紀元節^{キゲンセツ}は、天皇様のお位につかせられたのをいはひたてまつる日であります。そののちに山の上におまつりのばしよをつくって、ごせんの神々たちをていねいにおまつりなされました。また、いくさで、おかくれになりました御兄上様をばさきにおはうびりになりましたが、

このたびさらにはうむりかへなされました。

第四課

日本武尊

ヤマト タケルノミコト
日本武尊は、小さい時から人にすぐれて、かしこいお方でありましたが、力は、かくべつ、つよく、げんきなことをお好みになりました。大そし、ぶげいにすぐれて、をられました。

尊は、十六さいの時に、つくしのくまを



ごせいばつになりましたが、そのかしらが、さけに急うておましたところをおうちとりなされました。

第五課 日本武尊 三

尊は、東北のえびすを、せいばつにお出でになるとちゅうで、いせ大神宮にごさんけいになりました。そのときをばうへさまから、つるぎと、火うちぶくろとを、い



たゞかれました。

尊は、するがの國のぞくにせめられたとき、このつるぎと火うちぶくろとで、おふせぎなされました。

尊は、するがのぞくを平げなされてから、さらに、東方のえびすをごせいばつになつて、これを平げなされました。

第六課 菅原道真公



菅原道真公は、幼い時から、孝行の心ふかく、また、かしのい上に、よく、先生の教をまもつて、べんきよーせられましたから、小さい時から、よくお出来になりました。道真公は、十一さいの春、父上と島田先生と、一しよに、梅見をいたされた時、よい詩をつくられましたゆゑ、人々が大そー、かんしんしました。

第七課

菅原道真公

道真公は、學問ばかりでなく、ぶげいもよく、おできになりました。されど、學問の方が、あまり、名高くありましたから、公が、ぶげいにすぐれてをられることは、誰も知りませんでした。ある時、道真公のともだちが、公をはづかしめようと思つて、公に『弓をいよ』とまう



しました。公は「おさは、つたないけれど
も、ごらんに入れませう」といって、弓矢を
とつて、まると向はれましたところ、矢は、
まとのまん中にあたりましたので、人々
は、みなこれを見て、はぢ入りました。

第八課 菅原道真公

宇多^{ウダ}天皇は、道真公の學問にも、ぶげいにも
もすぐれ、その上、忠義の心のあついこと



を御しよーちになつて、重くお用ひあそばされました。

道真公はのち、人のわる口によつて、つみをうけ、太宰権帥ダイサイゴンシウといふやくにおとされました。されど、公は、少しも君をうらみたてまつらず、そのおそばにをられた時よりも、一そし、天皇をしたはしく思はれました。

道真公が、死なれてから、まもなくつみの
なかつたことが、明かになつて、神にまつ
られ、天満天神とあがめらるゝよーにな
りました。

第九課

和氣清磨公

稱徳天皇のおん時に、宇佐の八幡宮の御
告でありますから、道鏡を、天皇の位につ
かせたらよろしくありますせうと申し上



げたものがありました。

天皇は、和氣清麿公を、宇佐の八幡宮におつかはしになつて、あらためて、神のおつげを、うけさせられました。

清麿公の友達に、豊永といふ人があります。したが、この人は、公に向つて、道鏡をおそれず、神の正しいおつげを受けて申し上げよ』といつて、はげまされました。

第十課

和氣清麿公

清麿公は、やがて、宇佐からかへられました。

『臣民にして、天皇の位をのぞむものあらば、すみやかに退けよ』

との、神のお告を申し上げられました。道鏡は、大そし、はらをたてまして、公を、大隅の國にながしました。



光仁^{コウニ}天皇の御時に、道鏡は、下野^{シモツケ}の國におひやられ、公は、みやこへ召しかへされて、重く用ひられ、のちの世には、神にまつられました。

第十一課

和氣清磨公及び其姉

清磨公は、姉の廣蟲^{ヒロムシ}と、仲よくありました。が、父の死なれた時などは、互に、家のどろぐをゆづりあつて、分つことをせられま



せんでした。

廣蟲もまた、忠義の心のあついであつて、よく天皇につかへ、弟清麿公を助けて、其の志をのばさせられました。

廣蟲は、又めぐみふかい人でありました。ある年、きょんで、すて子が、たくさんありました。廣蟲は、これをひろひあげて、みな、自分の子として、そだてられました。

そのかずが、八十三人にもなりました。

第十二課 藤四郎

藤四郎はきよーとの人で、をさない時から、土で物を造ることを好み、成長して、やき物を造るわざをまなばれました。

その頃、支那は、やき物のわざがじよーずでありましたゆゑ、藤四郎は、これを學ばうと思つて、道元和尚について、支那にわ

たり、六年の間、べんきよーして、二十七さいの時にかへられました。

藤四郎は、支那から持ちかへつた土で、三つのつぼをやって、北條時頼と道元和尚とにおくられました。

藤四郎は、やき物のわざを盛んにおこさうと思ひ、國々をめぐるつて、やき物にする土をさがしましたが、尾張の國瀬戸村で

はじめ、よい土を見出して、大それ、よろこんで、かまを開きました。それから、瀬戸のやきものがだん／＼盛んになりました。世間で、やき物を、瀬戸物といふよ／＼になりました。

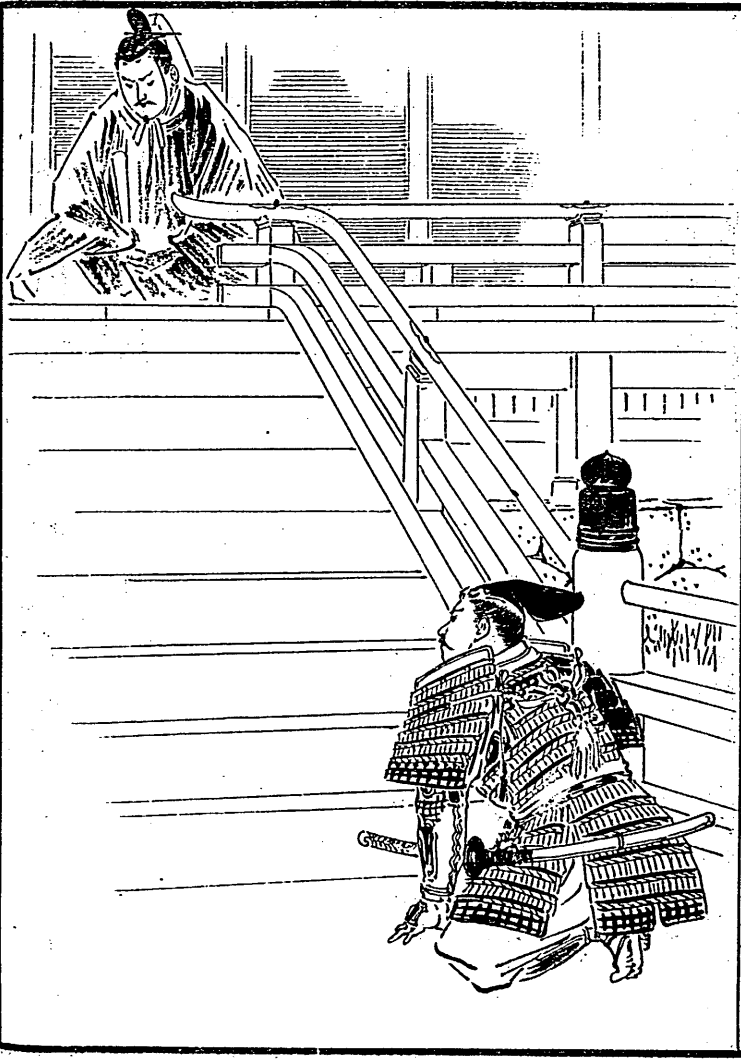
近い頃、瀬戸村の人が大きな碑をたて、藤四郎のてがらを、後の世につたへました。

第十三課

楠正成卿

楠正成卿は河内國の人で、大それ、忠義の心があつく、ちゑも、ふげいも、人にすぐれてをられました。

後醍醐天皇は、北條高時のわがま、をにくませられ、これをごせいばつなされようと、おぼしめされて、正成卿をお召しになり、いくさのことを、まかせられました。正成卿は、つゝしんで、御うけをいたし、城



を、赤坂と千早とにきづきわづかの軍ぜ
いでいろくとはかりごとをめぐらし
て、ぞくの大軍をさんぐにうちやぶら
れました。

これから正成卿の忠義にかんしんして、
官軍にしたがふものが、次第に多くなり
まして、つひに、北條氏を打ちほろぼしま
した。

第十四課

楠正成卿 ③

そののち、足利尊氏アシカミタカウヂといふものが、そむいて九州から、大軍をひきつれて、せめ上りましたとき、正成卿は、また、天皇のために、これをふせがれました。

この時、正成卿は、櫻井えきで、その子正行マナツラ卿に向ひ、「おれ、たとひ、うち死にすとも、そなたは、父の志をつぎ、ちよーてきをほろ



ぼして、君の御心を安んじ奉れ』と、いつて、
さとして、正行卿をば、河内の國もとにか
へし、自分は、攝津セツの國、湊川ミナトガハに向はれまし
た。

正成卿は、湊川で、尊氏といさましく、たゝ
かはれましたが、力つきて、遂に、弟正季マサスエと
ともに、うち死にせられました。

第十五課

楠正行卿

正行マサユキ卿は、てきから、父上のくびをおくり
こしたのを見られ、かなしみのあまりに、
はらをきらうといたされました。母上
は、『さよーなことでは、ゆくすゑ、君のおや
くにたつまい』と、いつて、いろく〜と、さと
されました。

そののち、正行卿は、父上の教と、母上の戒
めとを守り、遊びのをりに、いくさのま



ねなどして、ますます、忠義をはげまれました。

第十六課

楠正行卿

正行卿は、成長の後、たびく、足利の軍せいをうちやぶられました。後村上天皇が、吉野にみらせられた時、ぞくが大軍をひきつれて、せめよせました。正行卿は、今こそ、君のおんために、身をす

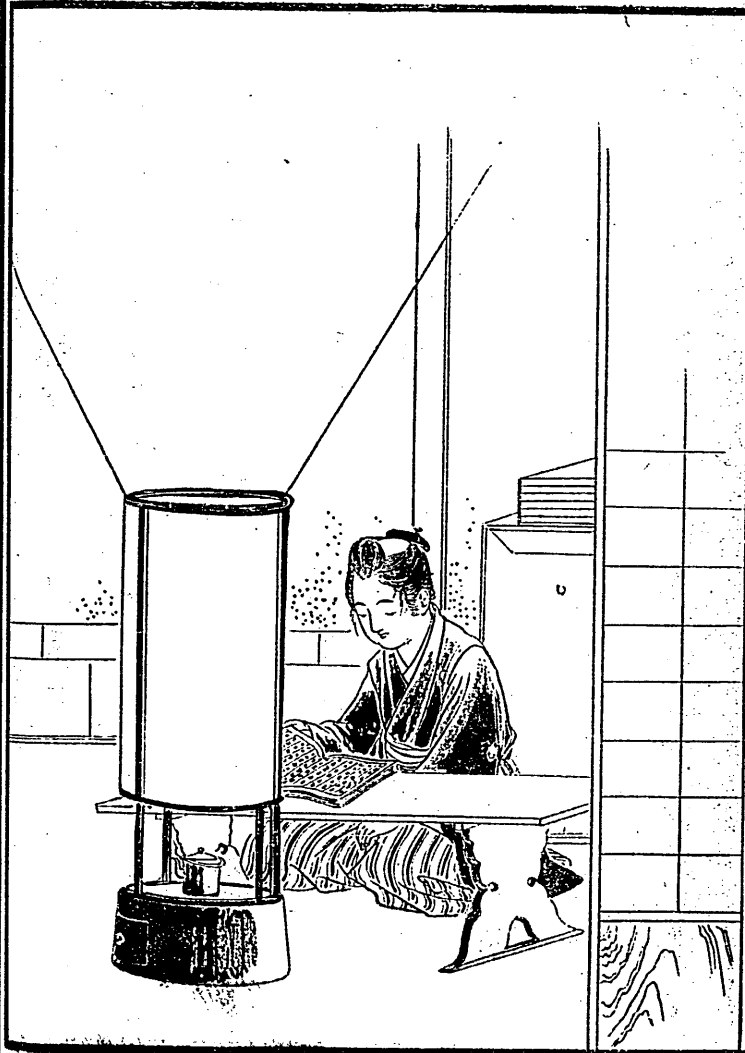


つづき時と思つて、天皇においとまご
ひを申しあげ、四條畷シヨウジツノカサにうちむかつて、ぞ
くとたゝかはれましたが、遂に、弟正時マサトキと
共に、うち死にせられました。

第十七課

伊藤仁齋先生

伊藤仁齋先生は、十一さいの時から學問
をはじめられました。朝早くから夜お
そくまで、一心にべんきよーせられまし



た。それゆゑ、そのすゝみ方が大そゝは
やくありました。

しんるいの人々は、先生に向つて『學者と
なつて、びんぼうするよりも、いしゃとなつ
て、ゆたかにくらす方がよからう』とすゝ
めました。

されど、先生は、『たん、思ひ立った事を、や
めるのは、ざんねんである』といつて、その志

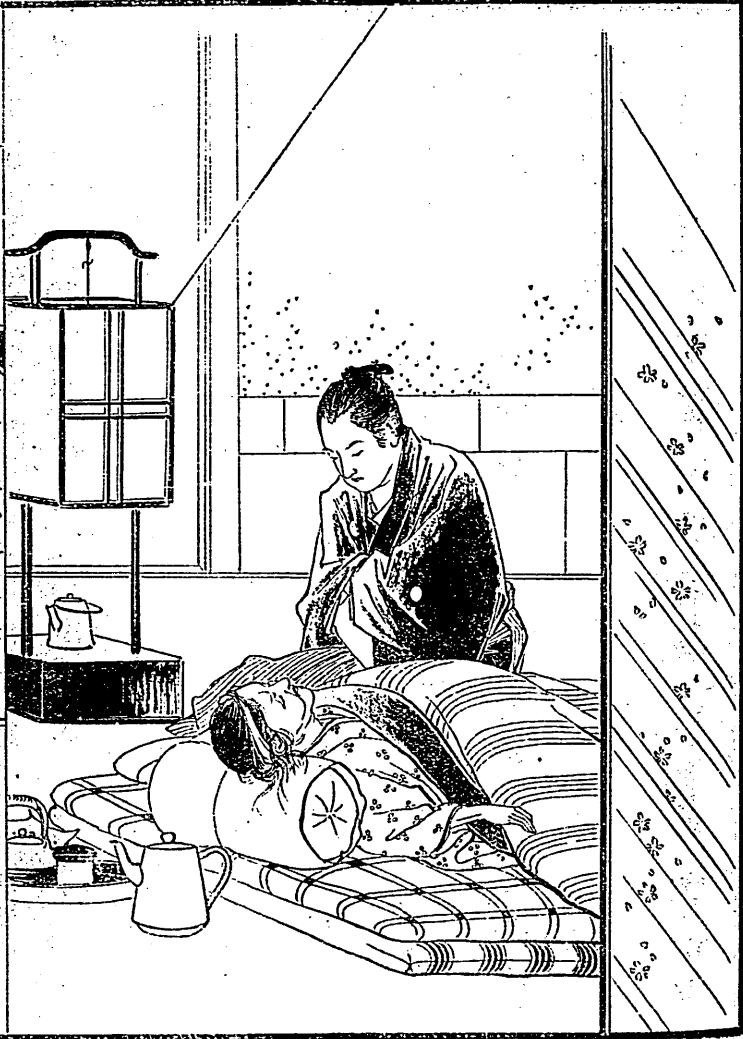
をかへず、ますます學問をつとめはげ
まれました。

第十八課

伊藤仁齋先生

先生は、幼い時から大それた孝行な人であ
りました。

ある時、先生は細川といふ大名から、よい
やくにまねかれました。そのころ、母上
がびよーきであつたゆゑ、先生は「行かれ



ぬ』といつて、日夜、母上のかんびよーをせられました。

かく、先生が、手あつく、かいほーせられたかひもなく、母上のびよーきは、いよく、おもくなりました。その時、母上は両手を合せて、先生に、あつく禮をいつて、つひに、死なれました。

そののち、まもなく、父上もなくなられたゆゑ、先生は、かさねがさねのふしあはせを、ひどく、かなしまれまして、久しい間、家にのみをられました。

第十九課

伊藤仁齋先生

先生が、まだ、年若い時、ある日、多くの學者たちと、徳大寺左大臣公の家にまねかれ、書物の中の文句をぎろんせられました。その時、學者たちは、はじめのうち、は



ものいひがやはらかでぎょーぎも、大そー！
正しくありました。が、いつの間にか、こゑを
あらくし、形をくづして、けんくわのよー
になりました。

されど、先生ばかりは、はじめから、をはり
まで、心をおちつけ、ぎょーぎを正しくし
て、をられました。だから、一ざの、人々は、これ
を見て、わが身の、かろがるしいふるまひ

をはぢり入りました。

第二十課 伊藤仁齋先生 (四)

ある日、先生のきんじよの人々が、其のあひ持ちの井戸がへをした時、先生は「私もおよばずながら、手つだひませう」といつて、でられました。

人々は、これをきのどくに思ひ、いろいろいつてと、めたら、先生は「みなさまのご



しんせつは、ありがたいけれど、私も、毎日、この水をつかつて居るゆゑ、手つだはねば、すみません』といつて、日ぐれまで、人々と共に、はたらかれました。

きんじよの人々は、先生が、かよゝに、けんそんであるのを見て、大そゝかんしんして、先生をうやまふことが、ますます深くなりました。

ミノルホド、カシラノサガル、イナボカナ。

第二十一課 鹽原多助

鹽原多助は、をさない時には、其の家が、まづしくありました。が、よくはたらいて、おやに、孝行をつくされました。

成長ののち、江戸にでて、炭屋にほゝこゝして、よくはたらかれましたが、しごとのひまには、ふるぞゝりを拾ひあつめて、これ



をなほし、再びつかはれるよーにしてお
かれました。

のち、主人に、多くのぞーりの入用があつ
た時、多助は、新しく買ふには及びませぬ
といつて、彼のふるぞーりを、あまたとり
いだされましたので、主人は、其の心がけの
よいのに、かんしんしました。

第二十二課

鹽原多助 ㊦

又、多助は、主人の家で多く、炭くづのすたるのを見てをしいことにおもひ、主人にこうて、これをもらひうけることになされました。

多助は、これから毎日、炭くづを拾ひあつめて、俵に入れ置かれましたところが、十年あまりの後には、何百俵といふ程になりました。



國史傳記 卷三 尋常科 五十七

多助はこの炭くづをもとでとして、炭屋をはじめしよーぢきにして、一心にはたらかれましたが、つひに、名高い炭問屋となられました。

チリモツモレバ山トナル。

第二十三課

鹽原多助

多助は、金もちとなられました。でも、その金をみだりにつかはれませんでした。されど、



人のため、世のためにはよろこんでこれを用ひられました。ある時きんじよのみちが、大雨のために、こはれて、おーらいのもの、が、ひどくなんぎをしました。

多助はこれを見てきのどくに思はれたくさんの金をだして、みちをつくろひ、更に、石をかひもとめてこれをしかれましたゆゑ、これからのちは、いかなる大雨でも、み

ちのわるくなることがなくなりました。

世ノタメニツクセ。

第二十四課 公德

人は、わが身がつてのことをせず、に他人のためを思はねばなりません。

一、やくそくのじかんをたがへてはなりません。

一、社・寺・学校などのかづに、らくがきをし

又は、そこにそなへつけてある道具を、
そこなつてはなりません。

一、とめてあるところで、鳥をうち、魚をと
らつ、又は、木ををって、はなりません。

一、田はたに、ふみ入つて、作物をあらして
はなりません。

一、出入りをとめてある場所に入り、又は、
通行どめの道をとほつてはなりません。

ぬ。

第二十五課

大和心

日本人は、昔から、忠義の心があつくて、君
の御ためには、命ををしまさず、また、勇氣が
あつて、なさけぶかく、その上、しよーぢき
で、いさぎよい心をもつてゐます。この
心を、大和心と申します。

これを、たとへますれば、大和心は、櫻花の



よーなうつくしいすぐれた心と、松が雪
にも風にもおそれぬつよい心とを、合せ
たよーなものであります。

1
4
357

國民修身書卷之三終

R120.1

明治三十五年八月七日印刷
 明治三十五年八月十日發行
 明治三十五年十一月十九日訂正再版印刷
 明治三十五年十一月廿三日訂正再版發行

著作權
所有

發行所
 發行所
 代表者
 印刷所

國民修身書
 學校常用小

價		定	
全四册	金參拾八錢	卷之一	金八錢
卷之二	金九錢	卷之三	金拾壹錢
卷之四	金拾壹錢		

會社式
 二東
 丁京
 目市
 二京
 十橋
 一區
 番築
 地地

河
 本
 龜
 乙
 助

會社式
 二東
 丁京
 目市
 二京
 十橋
 一區
 番築
 地地

橋
 本
 忠
 次
 郎

會社式
 二東
 丁京
 目市
 二京
 十橋
 一區
 番築
 地地

國
 光
 社
 編
 輯
 所

國民修身書
 卷之三
 三六

國民修身書

尋常小
學校用

卷四

4
357

檢定合格本

K120.1
83a
4